



= いまの憲法が私たちの暮らしを護る =

総選挙結果を考える

四党共闘効果を次に活かす

今回の総選挙の結果について、マスコミなどを通じて内容は大方において小選挙区選挙の野党共闘に対しての否定的な見解がほとんどです。

自公政権は当初、非常な危機感を持つて臨んでいました。しかし結果的には絶対多数を獲得し、野党共闘は第二次岸田政権の発足を許してしまいました。

この敗因は、国民が野党共闘を否定したと多くの論調が述べていますが本当にそうでしょうか。この点が今回の選挙における評価の過半を占めるものと思いますので皆さんとともに考えてみたいと思います。

本当に野党共闘は敗因でしょうか。ここに立憲民主党の小選挙区の当選者数を見ます。獲得議席は解散時を上回っています。当然、

共闘区が殆どです。統一候補が勝っているという事です。この状態を自公連立政府は脅威として選挙期間を通じて4党合意を攻撃してきました。自公候補

は演説の冒頭、必ず共闘政党の意見の相違を強調して攻撃してきました。しかし選挙結果は共闘の成功を証明する結果となりました。これは今後の大きな成果だと思えます。

一方、自公が多数の議席を占めることになった結果は反省とともに今後の活動についての方針になるものと思えます。今回の敗北の大きな原因は比例区における政党の活動が問われたことによるものだと思われまます。特に自公における地域との結びつきは強固なもので活発な地域活動が求められます。

さらに低投票率の改善です。コロナ禍で貧困、医療、格差などの影響がさらに大きくなりました。国民の多くが直面している困難の解決のために目に見える活動が求められ、投票行動に結びつくものと思えます。

選挙後の情勢は大きく改憲の方向に向かいます。安全保障の名のもとに防衛費が増額され、敵基地攻撃論がより強く主張されてくると思われまます。国民の貧困、格差、生活の不安定などの解決は後回しになります。

この状況を変えるためには来年夏の参議院選挙で勝たなければなりません。私たちは今回の総選挙で大きな成果を得ました。共闘こそ勝利の道筋です。それを政権与党は十分理解しています。それだけにますます攻撃が激しくなると思われまます。みなさんと共闘でより大きな成果につなげたいと思えます。

今月の予定です



_ 皆さん 気軽に参加ください _



12月5日(日) 13:30 ~ 16:30

DMD 視聴と意見交換 僕らはあの事件からまだ何も学んでいない
南部梅郷公民館 森達也監督作品「A」 南地域九条の会

12月9日(木) 16:00 ~ 17:00

9の日 九条通信配布・ボードでアピール
梅郷駅 通路 野田・九条の会

12月11日(土) 13:30 ~ 16:00

野田・九条の会 懇談「台湾海峡問題と岸田首相の外交方針」
12月例会 中央公民館 講座室 野田・九条の会

12月19日(日) 13:30 ~ 15:30

テレートワーク ちょっと變な 《PC, スマホでの申込み先》
「おしゃべりカフェ」 n.katagiri88@gmail.com(片側)
野田・九条の会

1月9日(日) 13:30 ~ 16:30

DMD 視聴と意見交換 テニアン島「玉砕の島を生きて」
南部梅郷公民館 南地域九条の会

報告

平和のつどい2021

映画と講演のつどい

主催 平和のつどい・のだ2021 実行委員会



11月21日興風会館で行われた映画と講演の集いには大勢の市民が詰めかけました。講演で三上監督は、いま沖縄宮古島などへの自衛隊の基地の増強と配備がどんどん進んでいること、そのことは日本全体がアメリカの防波堤となることである、日本全体が危ない！と力を込めて話されました。

映画では、基地ができるそこに住民が協力させられる、そして用がなくなるとスパイと疑われたり、住民同士の監視など、沖縄の歴史が物語っていることがよくわかりました。これらに対抗できるのは有権者の力だけだとも。

「沖縄はたいへんねー」ではなく自分事として捉えてほしいとも。これからも時々このような企画が必要だと考えさせられました。



入口では消毒、検温、入場記録など



新たにネット配信-全国各地で視聴

自民の”改憲したい” なぜ変えたいというのか

◆ 先を考えない”攻撃する能力”

昨年9月、安部晋三首相は「敵基地攻撃能力を持たなければならない」と突然言い残し退陣した。

その後の菅政権はこれに触れず一年で終わり、次期総裁選で高市候補は攻撃能力は必要と安倍政権の継続を明言、さらに防衛予算の倍増を声高に訴えた。

11月の衆議員選で自民は予想外な堅調ぶりをみせ、高市氏は政調会長に就任し攻撃能力向上を政策に盛り込み、改憲可能な三分の二超えをテコに九条改憲で軍備増強を図ろうとしている。

この敵基地攻撃能力は相手領域内でも阻止する能力とも言い換え国民の抵抗感を和らげようとしているが、どのように変えようとも他国に対して先制攻撃するとの意思を示すことになり、第二の真珠湾攻撃となりかねない。先の大戦で攻撃先となった米国は日本の国力をはるかに超えた大国、仕掛けた日本は資源を他国に頼る小国で、総力戦に持ち込まれ惨めな結果を招いた。高市氏などが想定する相手国は中国であり、尖閣また台中関係において緊張を強いられているが、日本との国力差は軍事、経済、また国土、人口などにおいて敵対できるはずもないことは明白で、近年の様々な分野の世界ランキング順位もそれを裏付けている。

実感する一例として大学国際ランキングや国民の収入を比較すれば中国より私たちは低位にあることを落胆しつつ認めるしかない。軍備増強しその上争

うことは国民に再び惨禍をもたらすこととなる。

政府が行うべきことは良好な日中関係を外交で築いていくことであり、できなければ有能な政権に変えるしかない。

◆ 独りよがりな”緊急事態条項”案

敵基地攻撃能力、改憲をコロナ禍の中なぜ出すのか、冷静に振り返り考えてみれば政権の維持が心もとなくなってきたとき、また慢心し傲慢になったとき必ずといっていいほど言い出す。退陣後の影響力低下を怖れて言い、また北朝鮮ミサイル発射時に緊急アラートで避難行動を強制させられたことを思い出せば分かりやすい。国民を不安におとし入れればその反動で強いリーダーを求める。そしてさらに悪化しないよう心を癒す強いものが必要となる。この心理をいま巧みに利用しようとするのが自民改憲草案の緊急事態条項（第99条）だ。「…内閣は法律と同一の効力を有する政令を制定することができる…」のくだりはもう、ナチスの独裁を許した当時のドイツ社会を再現しかねない恥ずべき記述といえる。

一人一晩で考えた法で全国民を従わせる、その恐ろしさをしっかりと認識したい。

独りよがりの政治を防ぐために、憲法が国会議員に課した第15条の<…全体の奉仕者…>を改めて読み解きたい。



人間の問題として捉えよ



この処、自民党政府の憂慮すべき危険な政治に対し、いかに新しい次の時代の担い手を育成し得るのか、ということをしみじみ思わずにはいられない。

自民党が議会の圧倒的多数を占め、一党独裁的な政治をほしいままにしてきたのは、何と言っても、野党があまりにも弱体だったからである。従って、健全な野党の強化こそ、何としても果たさなければならない当面の課題である。そのためには革新陣営を批判し続けることに、ためらいを感じる。しかしこういう姿勢は右も左も悪いとして切り捨て、自分は手を汚すことなく、何もしないで傍観する高踏の態度であるとして非難されることもあろうし、場合によっては自身の意図を超えて、保守党の立場を有

利にする反動的役割すら果たすのではないかと、警告もある。しかし、今回の選挙の結果が明示しているように、立憲民主党が共産党との共闘により一応成果を挙げることができたことは事実である。

やがては自民対立憲を中心とした野党連合共闘対決の時代が来るのではなかろうか、と密かに取り沙汰される時勢になってほしいものと思っている。これが正に国民が望んでいる声でもある。そして密かに追求してきた問題点が、やはり核心を外したのではなかったのではないかと、思われてならない。

いかに安定しているように見えても、現在の保守党が永久に政権の座に胡座をかき続けることはありえないことだ。やがてこの体制が崩れる時、いかなる勢力がそのあとを継ぐことか。問題はまさにここにある。

稲垣 政夫